

「サナギから羽化へ (1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

私の教室では、幼虫もサナギも、カゴに入れて飼う方法はとっていない。子どもたちができるだけ昆虫に近づき、その毎日の変化を肌で感じられるようにする為である。従って、幼虫がよく「脱走」する。脱走するのは、決まって、蛹化直前の終齢幼虫である。

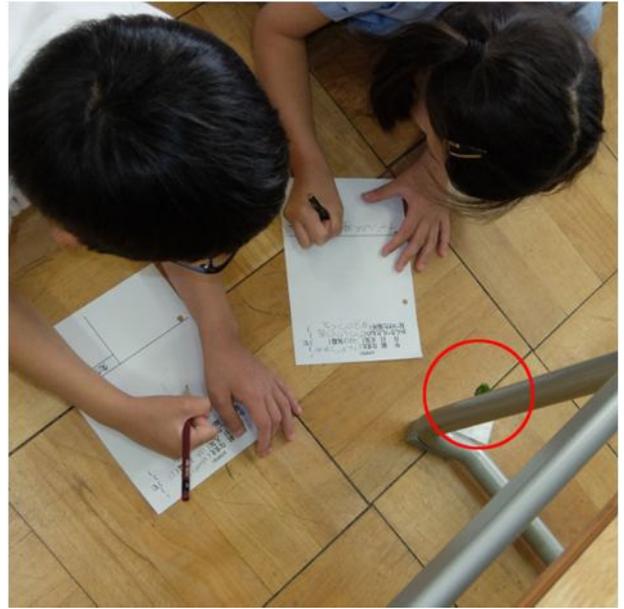


先日、ある女兒の机の周りが「騒ぎ」になっていた。「私の机のあしに、幼虫がいる!」「あ! ホントだ!」



確かに幼虫である。しかし良く見ると、すでにサナギになりかけて、糸で自分の体を固定している。これは終齢幼虫の最後の姿で、「前蛹 (ぜんよう)」と呼ばれる状態である。幼虫なら移動できる。サナギも慎重に剥せば、移動可能だ。しかし前蛹だけは下手に動かすことはできない。

私は、机の主の女兒に頼んで、使っていない同型の机に引っ越してもらった。引っ越したのは前蛹ではなく、机の主の女兒のほうである。



この女兒は、何人かの友達と机を囲んで、さっそく観察カードを書いていた。こうした自発的な観察行動は、3年生の1学期には珍しいことではない。科学の入門期の子どもたちにとっては、目の前の変化すべてが、探求の対象なのだろう。



観察カードは、完成後すぐに私に提出された。「びっくり」の「っ」は、あとから付け加えたものらしい。絵も分も簡単なものだが、私はこの観察カードを高く評価した。その場で印象が薄れないうちに書ききっていること、自分の机に幼虫 (前蛹) がいた驚きが、短文で素直に綴られているからだ。